説教要旨『こだわりの理由』

ローマの信徒への手紙　１４章１～１２節

ローマの教会には、様々なこだわりを持っている人がいました。「野菜だけを食べている人」、「ある日を他の日よりも尊ぶ人」、「何を食べても良いと信じる人」、「全ての日を同じように考える人」。この様なこだわりを持つことについて、伝道者パウロは「各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです」（5 節）と否定しませんでした。なぜなら、それらのこだわりは全て、「主のため、神への感謝」（6 節）から生まれているものだったからです。むしろパウロが嘆いているのは、そのお互いのこだわりを批判し、軽蔑し、裁き合っている教会の姿でした。どの様なこだわりがあるにせよ、「主のために」キリスト者が最もなすべきことは、主イエスが求められたように、「隣人を愛すること、相手を受け入れること」（13:8～、14:15、15:7）であったからです。

紛争地域を訪れた写真家の桃井和馬さんは、「正義の反対は悪ではない。正義の反対は、いつも正義だ」と感じてこられました。対立と分裂は、大抵、正義と正義の、こだわりとこだわりの衝突から生まれます。とは言え、互いに譲り合えないこだわりがある以上は、衝突や対立を避けることの方が難しいでしょう。誰だって、相手を自分の正義に従わせたいと思います。それ故この世では、互いの正義やこだわりが、相手を批判し、軽蔑し、裁くための火種となっていきます。こだわりの理由が、「私のため」である限りは…。パウロは、「主のために」を合言葉に出来るキリスト者は、相手を受け入れることができるはずだ、それが決して夢物語ではないことを世に示すことができるはずだと励ましています。ある神学者は、「教会がこの世でできる最大の社会貢献は、教会が教会であり続けることだ」と語りました。「私のために」と互いに蹴落とし合い、それ故、孤立し合い、それ故、理解し合うことを諦めざるを得ない世の流れのなかで、それでも互いに受け入れ合おうとする、世にはなき交わりを教会が示し続けることができれば、これほど凄いことはありません。「このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます」（19 節）。

だからこそパウロは、誰かを裁く前に、あなた自身が「神の裁きの前に立つ」（10 節）者であることを思い起こさせ、「主のために」キリスト者が本当にこだわるべきは「隣人を愛すること、相手を受け入れること」であると訴えています。この世において、他者への、敵への愛をも諦めないために、キリスト者は、主イエスの十字架を通して示された神の愛と赦しが自分にとって何であったのかを聴き続け、新しく知り続けていくのです。

（文責：望月達朗牧師）